

ISSP 柏賞を受賞して

極限コヒーレント光科学センター 軌道放射物性研究施設 藤澤 正美

第 13 回「ISSP 柏賞」を受賞した藤澤です。H27 年度で定年となる私にとって、今回の受賞は物性研での仕事を振り返る良い機会となりました。以下、まずは私の物性研人生を振り返ります。

1975 年、六本木に建物があった物性研に就職し、私の物性研人生が始まった。この時代にいい思い出は無い。今の言葉で言う「パワハラ」や「いじめ」などを受けたわけではない。性格の悪いスタッフがいたわけでもない。ただ研究室と当時の私との相性が悪かった、としか言いようがない。この時代は、研究所を辞めることばかり考えていた。辞めることはなかったが、研究室で真空紫外分光装置を担当していたことから、共同利用が始まる直前の、田無市(現在の西東京市)にあった「軌道放射物性研究施設」(田無の SOR 施設)に移籍した。

田無の SOR 施設では、装置は手作り感満載であった。それが当時の私の性格にマッチした。また、共同利用者などの他組織の人達との関わり合いを通じて礼儀作法を学んだ(このあたりが、最初の研究室でうまくいかなかった理由かもしれない)。そして、具体的なビジョンを持っていたわけではないが、放射光は成長する分野だと感じ、できるだけ長く関わりたいと思った。放射光分野は、私の想像をはるかに超える成長をし、今も成長し続けている。

田無の SOR 施設で仕事を始めたときから、新しい放射光光源(加速器)の建設検討は始まっていた。予算その他の都合で、加速器を作ることは先に延ばし、まずは、高エネルギー加速器研究所放射光施設(KEK-PF)に物性研専用実験装置(物性研ビームライン)を作ることになった。私が主に担当したのは、ビームライン 19B の分光器である。紆余曲折はあったが、何とか形にして論文にすることができた。その論文は、単行本「Modern Developments in X-ray and Neutron Optics」(Springer)中の第 2 章「The BESSY Raytrace Program RAY」(F.Schäfer 著)に参考文献の 1 つとして引用されている。本章は、放射光用軟 X 線分光器の性能評価のためのシミュレーションプログラムについて詳しく解説されており、この分野の専門家になろうとする人にとって良い入門テキストである。そのようなテキストに私の名前が載っているということは、この分野にささやかな足跡を残せた、と自己満足している。建設後の物性研ビームラインについては、第 12 回 ISSP 柏賞受賞者の福島昭子氏、原沢あゆみ氏の所感文(「物性研だより」、第 55 巻第 2 号の 4、5 ページ)に、書かれています。

KEK-PF ビームライン建設後、新放射光源建設の検討が本格的に始まったが、計画は実現せず、SPring-8 に東大アウトステーション(ビームライン BL07LSU)を建設することになった。ここでも分光器を担当するつもりでいたが、分光器は、主に SPring-8 の若手のスタッフが担当し、私はそのアドバイザー的な役割をした。KEK-PF での物性研ビームライン建設で、なんとなくやり残したことをここで消化しようともくろんでいた。が、世の中、私が考えていた以上に進歩していたことを考えれば、適切な役割分担であった。また、世代交代の時期であることを強く感じた。

その後、放射光から離れて、柏キャンパスで高次高調波発生(HHG)レーザーの分光系の製作に携わった。ここでは、放射光で経験したことが大いに役に立った。分光系の図面を最初から自分で描いたことは、「田無の SOR 施設」時代の手作り感を思い出させた。最先端の分野に居ながら、なつかしい思いがするのは不思議な感覚である。

以上が、私の物性研での主な履歴です。40 数年在籍しましたが、マンネリに陥ることもなく、それなりに充実した物性研人生でした。これも多くの方達のサポートがあったおかげです。その結果として「ISSP 柏賞」をいただき、無事、定年を迎えることができました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございます。タイトルは「ISSP 柏賞を受賞して」なのに、「定年を迎えて」の所感文にもなってしまいました。受賞と定年が重なってしまい、分離して所感文を考えられませんでした。ご容赦願います。

現在、短時間勤務職員として物性研に勤務しております。このような機会をいただきありがとうございます。時間的にも能力的にもできることは限られますが、しっかりと仕事をしていきたいと思っております。

